

建築主：八木 晃一  
 設計：株式会社 理工舎  
 施工：株式会社 理工舎  
 所在地：香取市神生

～農家の暮らしとともに引き継がれる民家～

## 香取の引き継がれた家



外観南西

最大の改変は、元茅葺の大屋根にすず窓風の開口部を新設したこと。北関東南東北ではしばしばみられるかたちだが、冬には家の奥深くまで陽が差し込み明るくなった。以前施された改修により軒が垂れ下がってしまっていたが、大工の高野さんは、岩手県での経験があったために、気仙大工に特徴的な工法である出桁造りをここに適用し、問題を解決した。

屋根の茅を下ろしたとすると4トンの産廃になるが、この手の民家は自重で安定が保たれていることを慎重に扱い、茅を残してその上から金属板葺きとしている。茅の断熱効果も期待できる。床下補修で出た丸太大引の古材は刻んで薪ストーブの炉枠や柵に転用するなど、住まい手であるご家族と知恵を出し合った痕跡が随所にうかがえる。「2年近くかけてじっくり改修ができたのも、家主家族が農家さんで自然の顔色をうかがいながら進めるような仕事に理解があったから」と高野さんはいう。結果

的に廃材処理費を大幅に減らし、誰にでも手に届く工事費でできた。家主を交えて民家と対話しながら改修を進めていくうちに、理があるのに今では使われなくなった技術や知識を再認識することもしばしばだったという。

建築史家の藤森照信は、民家研究の草分けである今和次郎の民家のとらえかたを〈器〉と〈中味〉という言葉を用いて説明しているが、それを援用するなら、人間の暮らす〈器〉としての民家だけを改修しても古民家再生にはならない。生活という〈中味〉と不可分な全体としてとらえてこそ古民家再生が可能になる。香取市神生の八木晃一さんの民家の物語はそのことを身をもって教えてくれている。(岡部 明子)



室内



スズ窓風採光